



## 湛山の「五つの誓い」

浅野 純次

(経済倶楽部理事)

▼この5年間で6人目の首相の登場ですが、今度の野田首相も長期政権になると思っている人はほとんどいないでしょう。財務省に取り込まれているとか、地味すぎるとか、いろいろ言われていますが、愚直そうなのは過去6人の宰相に比べ相当なもので、その限り多少は期待が持てるかもしれません。

▼何をおいても津波の被災地復興と原発問題に道筋をつけることと、デフレ経済対策が回り出すようにすること、の二点を期待したい。民主党が、単に政権を取るだけが目的の政党だったと言われないためには、首

相が党内ばかり見るのではなく、目線を国民に合わせて訴えかけることです。もちろんそれは国民に迎合することではなく、必要なのは、結果として国民のためになる政治を進めるという強い意志です。

▼昭和32年1月8日、首相に就任したばかりの石橋湛山が、全国遊説第一声として日比谷公会堂で演説した「わが五つの誓い」をすべての政治家に読んでほしい。その第一は「国会運営の正常化」で「国会がまっすぐに行くように泥仕合やいたずらなる紛争を起すような国会でないようにする」などと主張し、以下「政官界の綱紀粛正」「雇用と生産の増大」「福祉国家の建設」「世界平和の確立」について言及しています。

▼「雇用と生産」は特に興味深いので一部、紹介しておきます。「ところが幸いなるかな、わが国には過剰と称せられるほど優秀な人が沢山いる。(笑声)この人に十二分に働いてもらうようにするということが、国力を今後伸ばし、ひいては国民の生活を向上させる

ところの唯一の道である。この人を十二分に使えないということは、いわゆる政治の貧困でありましょう。

(拍手)。「失業は資本主義最大の悪」だと主張し続けた湛山らしい言説です。(傍点筆者)

▼五つの誓いの後で、ここが湛山の真骨頂ですが、ご機嫌取り政治の危険性に言及します。一部を引用しますと「さて民主政治というものは非常に難しいものがあります。民主政治は往々にして皆さんのご機嫌を取る政治になる。私は皆さんのご機嫌を伺うことはしない。ずいぶん皆さんに嫌がられることをするかもしれない。われわれはその場合に誤るかもしれない。誤ったらどうか批判をしていただきたい。私どもは所信に向かつて、ご機嫌取りはしないつもりであります(拍手)ご機嫌取りをせずに、内においてもあるいは外に対してもわれわれの所信どおりに進んでまいるつもりであります」(『石橋湛山全集』第14巻)。

▼野田首相も、このような剛直さで国民に訴えたら、

国民は(拍手)や(笑声)をもって応えるでしょう。それが本物の志であれば、自分たちに当面は不利と思われる所信でも受け入れる度量はあるのではないか。国民はそのようなリーダーシップを渴望しているはずです。野田さんが駅頭で配り続けてきたピラを會員の田川修司さんからいただきましたが、直近の842号では「現実を直視し、困難な課題から逃げない、先送りしない姿勢」を強調しています。その言や良し、政治の劣化にぜひ終止符を打ってほしいものです。

▼先月号に震災復興では後藤新平より湛山と書きましたが、現実には湛山は後藤の政府主導を批判し、政府は自治体への援助に徹するべきで事業主体となるべきは自治体である、自治体の復興事業は自治体つまり住民の知恵と意志によってなされるべきで政府は余計な口出しをしてはいけない、と言っています。政府のすべき「援助」とは①法令による援助、②政府事業でのインフラ援助、③資金援助のみという。まさに至言でしょう。